「生体とデンチャー」

　デンチャー製作において諸先生方はかなり確立されており、われわれもその恩恵に預かっているところではありますが、未だ完全な技法が確立されていないのも事実です。印象採得や咬合採得など歯科医師サイドの行為については技工士サイドでは関与しにくいところです。この上に昨今のデジタル技術や今までのテクニックを駆使しても、模型に合わせているだけで生体に合わせているかは疑問なところです。元となる解剖を学び、必要な印象や咬合をいかに求めていくか考察し、補綴物に表現できるかともに考えたいと思います。